

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲第970号	氏名	鈴木 尚徳
論文審査担当者	主査 小泉 知展 副査 中山 淳 ・ 大森 栄		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>進行性腎細胞癌に対するサイトカイン治療後のソラフェニブ長期使用は臨床試験で十分に許容され予後の延長が証明されているが、実際はサイトカイン治療抵抗症例以外にも使用されることがあり、その結果を日常実臨床に直接当てはめる事はできない。進行性腎細胞癌に対するソラフェニブの有効性および安全性についての日常実臨床の調査を目的とし、信州大学泌尿器科で30症例、関連施設11施設80症例における110例を対象とした後向き、質問紙法ベースの検討を行い、全生存期間および無増悪生存期間を主評価項目として、リスク因子の評価、有害事象を検討した。</p> <p>その結果、鈴木は以下の結果を得た。</p> <p>①生存期間 全生存期間は中央値に到達せず、1年生存率77.5%であった。MSKCC分類（Favorable risk と Intermediate and Poor risk の2群にわけた）でみるとFavorable が有意に予後良好であった（$P=0.025$）。無増悪生存期間の中央値は11ヶ月であった。同様にMSKCC分類でみると2群間に有意差は認めなかった（$P=0.253$）。 この結果がソラフェニブ単独の治療効果であるのかを確認するため、サイトカイン治療の有無毎にみると、全生存期間はサイトカイン治療群が有意に予後良好であり（$P=0.002$）、無増悪生存期間はサイトカイン治療群が有意に予後良好であった（$P=0.017$）。さらに腎摘後のサイトカイン治療の有無毎にみると、全生存期間はサイトカイン治療群が有意に予後良好であり（$P=0.034$）、無増悪生存期間では有意差はなかった（$P=0.091$）。</p> <p>②リスク因子の検討、多変量解析 $P<0.05$以下を示した項目（肝転移・Na低値・CRP陽性）、MSKCC分類の5因子で多変量解析を施行し、CRP陽性（$P=0.004$）と肝転移（$P<0.001$）が有意なリスク因子であった。</p> <p>③有害事象 皮膚症状が手足症候群を含み67%と最多であった。有害事象の頻度や内容は過去の報告と概ね同様であった。</p> <p>本論文は多施設共同で110例のソラフェニブ使用症例をまとめており実臨床を反映した結果であった。無増悪生存期間の中央値は過去の報告に比べ良好であったことはサイトカイン先行投与が良好な生存期間に影響を与えている可能性も考えられた。またリスク因子となったCRP陽性、肝転移を認める症例ではソラフェニブの効果が得られにくい可能性が示唆された。 以上から主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			